

## 総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

## 巻頭言

総合科学研究所主任 山中 なつみ  
YAMANAKA Natsumi

健康の保持・増進には栄養バランスのとれた食事が重要ですが、「どの栄養素をどれだけ摂取したらよいか？」の根拠となるのが厚生労働省の策定する「日本人の食事摂取基準」です。かつては「栄養所要量」とされていましたが、2005年より「食事摂取基準」となり、性別、年齢区分別にエネルギー及び各栄養素の摂取基準値が示されています。新たな調査・研究結果、食生活の課題をふまえて5年毎に改定され、現在は2020年版が使用されています。

2020年版では、高齢者の低栄養・フレイル予防が改定ポイントのひとつとされ、高齢者の年齢区分が細分化されるなどの変更がありました。各栄養素の基準値は大きく変化するものではありませんが、近年、改定毎に基準値が低くなっているのが食塩です。食塩は必須ミネラルであるナトリウムの供給源として重要ですが、過剰

摂取は高血圧の原因になります。ナトリウムの必要量は成人で1日600mg（食塩相当量1.5g）とわずかであり、適度な塩味の食事を摂っていても必要量に対して常に過剰摂取の状態です。しかし、おいしく食べることも大切であり、必要量から食塩の摂取基準を決めることは無意味です。日本では食塩の目標摂取量を「1日10g以下」としていた期間が長くありましたが、2012年にWHOが示した推奨量はその半分の「1日5g未満」でした。この世界基準もふまえて2020年版では1日の食塩目標量を成人男性では「7.5g未満」、女性では「6.5g未満」としています。

適切な摂取基準が示されていても、毎日の食事に反映されなければ意味がありません。「食事摂取基準」という科学的根拠を理解した上で、適切な食生活を提案するには様々な知識や経験が必要であり、本学で食について学ぶ学生の皆さんが将来社会で担うべき役割のひとつです。授業で専門的な知識を学ぶだけでなく、様々なライフステージの方と接して生活者の視点を養うことも重要であると考えます。地域貢献事業等への参加がその良い機会になることを願います。

## ● 総合科学研究所主催 ●

## 令和2年度大学講演会（令和3年2月22日）

## 「コロナ禍のオンライン教育経験を次世代の大学づくりに活かす」

講師：鈴木克明氏 熊本大学教授 [教授システム学研究センター長]

今年度の大学講演会は、コロナ禍において導入を余儀なくされた「遠隔授業」の活用について、教育工学をご専門とする鈴木克明先生にご講演いただきました。

ご講演の前半は、「同じ形ではなく同じ価値を追求する」、「非同期で学生の学習活動を支える」等の、対面授業の内容や順序にとらわれない「遠隔授業のデザイン7か条」について解説いただきました。後半は、遠隔授業をコロナ禍の次善策と捉えずに、学生の自律性を高める遠隔教育の特徴を今後の授業で活かすこと、ならびに授業以外の学習支援の重要性について解説していただきました。講演後の質疑応答では、各学科の特徴に応じた遠隔授業の課題について次々と質問がなされ、先生方の授業改革への意欲が感じられました。

今回の講演会はコロナウイルス感染対策のためオンラインで実施されました。先生方には2つの講義室に分かれて参



令和2年度大学講演会

加していただき、鈴木先生と2会場をZoomウェビナーを用いてつなぎました。講演から質疑応答まで順調に進行し、大学行事のオンライン化のひとつのモデルとすることができました。（文責：山中なつみ）

## 機関研究

## 「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～戦後昭和期の発展と拡大～

佐々木基裕代・河合玲子・遠山佳治・豊永洵子・三宅元子・吉川直志・吉田文

本研究は令和元年度～3年度の3年を期間としており、本年度は、その2年目に当たります。前期研究を引き継ぎながら、「戦後昭和期の発展と拡大」を今期のテーマとして研究を進めています。

共同研究においては前期に引き続き、『学園七〇年史春嵐』（1985年）以降の学園の沿革をたどる作業として、本学学生支援センター関係者へのインタビューを行っています。これまでに整理してきた学部学科に関わる調査と合わせて、より精緻な本学の歴史叙述を目指しています。また昨年度に引き続き、女子教育に関わる最新の研

究文献を輪読し、毎回2名の研究者が報告を行い、検討を行いました。

個人研究に関しては、各メンバーが自らの専門性に基づいた研究を進めています。本学が四大を開設し発展・拡大していく戦後昭和期における女子教育の位置付けについて、教育学、歴史学、音楽学、体育学、社会学等の多様な観点を総合し、学際的な研究を継続して遂行しております。

(文責：佐々木基裕)

## 機関研究

## 「大学における効果的な授業法の研究8」

～本学における効果的なアクティブラーニングの開発～

三宅元子代・市村由貴・河合玲子・佐々木基裕・渋谷寿・杉原央樹・竹内正裕・遠山佳治・羽澄直子・服部幹雄・野内友規・山田勝洋・吉川直志

本研究は平成30年度から3年間で期間とし、本年度が最終年度です。初年度は大学教育に求められているアクティブラーニング（以下、AL）の手法について共通理解を深めました。その後2年間に渡り、各研究員が担当する科目のなかでALを取り入れた授業実践について発表し、本学の学部・学科の特性に応じたALの手法を探るため全体討論を行いました。また、「ALを通してどのような資質・能力を育てるか」に関する明確な目標と評価について研究するために松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』、松下

佳代・石井英真編著『アクティブラーニングの評価』の2冊を輪読しました。各研究員は、章ごとに内容をまとめ、本学にも導入できるALについて全体で検討しました。今年度は、学会や研修会には十分参加できませんでしたがWeb視聴を行うなど、各研究員が工夫して新しい情報を収集し、本学の授業に参考となるALを用いた授業法と評価についてまとめました。これらの成果は次年度に報告する予定です。

(文責：三宅元子)

## 機関研究

## 「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」

幼児保育研究グループ

今年度は、幼稚園教育要領の改訂で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿としての10の姿」を念頭におきながら、付属幼稚園の教育課程の見直しに取り組みました。この教育課程は、再編成する中で、3年間の指導計画と各学年の具体的な活動との関連性に着目し、付属幼稚園独自の教育課程編成となるように検討を重ねました。また、子どもたちの遊びや身近な環境とのかかわりを表現するドキュメンテーションや音楽表現の分野では、大学の先生

の指導による研修で、様々な捉え方や実践方法を学びました。それらを保育の中に積極的に取り入れることで、子ども達の新たな面を発見することにつながっています。更に、ドキュメンテーションは、子ども達にとって、遊びの中で主体的な取り組みを互いに理解しあえるきっかけ作りにもなっていると考えています。

(文責：森岡とき子)

## 機関研究

## 「食と健康に関する研究」

近藤浩代代・駒田格知・伊藤美穂子・大曾基宣・小椋郁夫・澤田樹美・高橋哲也

本研究では発足以来、食物の入り口である口腔に重点を置いた“咀嚼”に関する研究を進めております。本研究会から発行された“かむ”ってなあ～んだ”という冊子を用いて、名古屋市・愛知県・岐阜県・三重県の関係教育委員会および小学校における小学生の反応をとらえ、教育現場への活用に向けて解析しています。さらに卒業教育研究会における研修として、卒業生へ冊子を配布し学修と媒体活用のアンケート調査を行いました。現在はこれらの集計を行い、口腔内の健康や咀嚼の大切さを普及するとともに、食と関わ

るさまざまな職業における活用や傾向について解析しております。また、今年度から名古屋女子大学付属幼稚園の食に関する研究が加わり、食と健康の紙芝居の作成も進行しております。次年度に向けて幼児や保護者における食の安全について研究活動を進めるべく計画を立案中です。これらの活動を通して健康社会における食の大切さについてあるべき姿の普及と教育・研究を行っております。

(文責：近藤浩代)

## 令和3年度プロジェクト研究

## 「学生の保育パフォーマンスを高めるための評価方法を導入した保育実習指導について

—領域「表現」を中心とした保育実践にルーブリック指標によるPA（パフォーマンス・アセスメント）シートを活用した取り組み—

平澤節子代・山本麻美

人前で何かを話したり演奏したりするとき、だれしも緊張するものです。これらのパフォーマンスでは、自分一人の時は上手くできても、他人に見られている状態では、普段の力を発揮することは容易ではありません。そのために日々の研鑽が欠かせないのですが、パフォーマンスの質を高めるためには適切に振り返り、課題を明確にすることが重要です。本研究は、保育実習指導における保育実践時に、ルーブリック指標による評価方法を導入する

ことで、課題の明確化を図り、学生の保育パフォーマンスの向上を目指すものです。段階的な観点項目による評価シート（PAシート）を開発し、自己と他者による評価（アセスメント）を通じて、保育パフォーマンスを数値として可視化することにより、実践と適切な評価（振り返り）が連続する仕組みを作り、その効果について、研究を進めて参ります。

(文責：平澤節子)

## 令和2年度「開かれた地域貢献事業」報告

短期大学部生活学科：石崎智恵利・武岡さおり・原田妙子・森屋裕治・山田勝洋

短期大学部保育学科：河合玲子 健康科学部看護学科：福田峰子

健康科学部健康栄養学科：伊藤美穂子・片山直美・近藤貴子・辻美智子・山田久美子・山中なつみ

文学部児童教育学科：渋谷 寿・坪井眞里子・豊永洵子・堀 祥子・村田あゆみ・吉川直志・吉田 文

本研究所が推進する「開かれた地域貢献事業」は年々発展を続け、今年で14年目となりました。令和という新時代に入り、地域の公共施設である名古屋市の瑞穂児童館、瑞穂保健センターとの交流事業に加えて、瑞穂区役所との連携事業も順調に発展し、今年もさまざまな事業が展開される予定でした。しかし、一連のコロナ禍により、参加者や関係者の安全を最優先に考え、一部の事業を中止する事態となりました。感染防止対策を講じ安全性に配慮して、例年とは異なる様式、規模で開催をしました。

瑞穂児童館との交流事業は、一部の講座を中止としたものの、保育・教育、生活関係で6講座と、児童館クリスマスイベントで5つの企画を行いました。クリスマスイベントは地域の恒例行事として定着し、今年は朝から夕方にかけて各企画が順に開催されまし

た。瑞穂保健センターとの交流事業では、協議の結果、安全性の確保が困難であるために、全講座を中止としました。瑞穂区役所との連携事業では、昨年に続いて、働く女性の支援を目的として、育休復帰予定の方々向けの講座を企画し準備していましたが、同様に中止としました。

これらはいずれも、健康科学部健康栄養学科・看護学科、文学部児童教育学科、短期大学部生活学科・保育学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所の教職員が協力して実施したもので、多くの方にご参加いただきました。今後とも、地域の方々と触れ合う機会を大切にしつつも、新しい生活様式に沿って安全性を重視し、取り組んでまいります。

(文責：森屋裕治)

## ① 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

クリスマスイベント 令和2年12月6日@

「第12回みんなでメリー・クリスマス！」

- ・クリスマスイルミネーション
- ・みんなでクリスマスを楽しみましょう！～クリスマスのおんがくかい～
- ・サンタさんとメリークリスマス！
- ・サンタさんのキラキラメガネをつくらう
- ・クリスマスのペーパークラフトをつくらう！

交流事業の各種講座 令和2年10月～令和3年3月

- ・おうちの人と一緒にからだで遊ぼう！ ・親子で楽しむ音楽あそび
- ・プログラミングを体験しよう！ ・よくかむおやつをつくらう！\*
- ・食卓を彩るカード作り ・音の出る不思議なおもちゃをつくらう
- ・絵本と造形あそびのワークショップ\*
- ・おいしく食べて健康に アフタヌーンティーから学ぶ英国の食文化\*
- ・動くおもちゃづくり

## ② 名古屋市瑞穂保健センターとの交流事業

令和2年度 一般介護予防事業「若返りきらきらセミナー」\*

- ・おいしく食べて健康に アフタヌーンティーから学ぶ英国の食文化
- ・なつかしい童謡・唱歌をうたいましょう
- ・自分だけのTシャツを作ろう！
- ・低栄養予防のための簡単スイーツ作り
- ・歩行は健康の基本！ ご自身の歩行年齢をチェックしませんか？
- ・健康寿命を生きるための「からだ講座」

## ③ 名古屋市瑞穂区役所との交流事業

令和2年度

「育休復帰応援講座

おいしく食べて健康に 時短で一本勝負！」\*

※新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止



おうちの人と一緒にからだで遊ぼう！



音の出る不思議なおもちゃをつくらう



みんなでクリスマスを楽しみましょう！



クリスマスのペーパークラフトをつくらう！

## 総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

### 瑞穂児童館との交流事業 「楽しく身体を動かして遊ぼう!!」

異年齢の子どもたちと自宅でもできる親子でのふれあい遊びや、表現遊びを一緒に楽しみました。音楽リズムに合わせて、子どもたちになじみのある曲に簡単な振り付けを加え、一緒に踊りました。その他にも、パネルシアターや、スカーフ遊びなど様々な活動を行いました。実際に子どもたちの反応を見ながら、活動することができ、良かったことや改善点を見つけることができました。音楽表現活動を参加者の方と共に楽しむ時間を共有でき、貴重な体験になりました。

文学部児童教育学科 幼児保育学専攻4年



楽しく身体を動かして遊ぼう!!



プログラミングを体験しよう!

### 瑞穂児童館との交流事業「プログラミングを体験しよう!」

小学生対象のプログラミング体験をサポートしました。サンプルのゲームを作りながら、Scratch (スクラッチ) の基本的な使い方を説明しました。サンプルゲームに制限時間をつけたい、得点を追加したい、という子どもたちからの要望にも、ヒントを出しながら、どうすればできるかを子どもたち自身に考えてもらうことができました。完成までしっかりサポートでき、子どもたちからも「わかりやすかった。またプログラミングしたい。」と言ってもらえて、とても達成感がありました。貴重な体験となりました。

短期大学部生活学科1年

### 瑞穂児童館との交流事業「第12回 みんなでメリークリスマス!」 「サンタさんのキラキラメガネをつくらう」

おもちゃの作り方を子どもたちに分かりやすく教えられるかとても心配でしたが、ゼミ生みんなで協力して事前に準備をしていたため、スムーズに分かりやすく教えることができました。現在、新型コロナウイルスの流行のため来られる人数が限られていましたが、そんな中、来てくださった方々が心から楽しんでいただけるようなおもちゃ作りを考えていたため、子どもたちに「楽しかった! またやりたい!」と言ってもらえてとても嬉しかったです。保護者の方にも「楽しそうでした。ありがとうございました。」と笑顔で言ってもらえました。また、このような機会がありましたら、子どもたちを楽しませられるようなおもちゃ作りを考えていきたいと思えます。

文学部児童教育学科 幼児保育学専攻4年



サンタさんのキラキラメガネをつくらう

### 今年度(令和2年度)運営委員

委員長

森屋 裕治  
MORIYA Yuji  
(短期大学部)

河合 玲子  
KAWAI Reiko  
(短期大学部)

羽澄 直子  
HAZUMI Naoko  
(文学部)

三宅 元子  
MIYAKE Motoko  
(家政学部)

山田 久美子  
YAMADA Kumiko  
(健康科学部)

### 研究所メンバー

所長

渋谷 寿  
SHIBUYA Hisashi

顧問

河村 瑞江  
KAWAMURA Mizue

主任

山中 なつみ  
YAMANAKA Natsumi

教授

越原 一郎  
KOSHIHARA Ichiro

職員

牧野 弘実  
MAKINO Hiromi

### 編集後記

総合科学研究所だより32号をお届けいたします。本号では機関研究の活動報告、来年度スタートするプロジェクト研究の内容ならびに令和2年度の地域貢献事業等について掲載されています。執筆いただきました関係者の皆様に感謝いたします。今年度はコロナウイルスで始まりコロナウイルスで終わる一年で、研究活動ならびに地域貢献事業も大きな影響を受けました。収束の兆しが見えず、人と人との接触が制限される日々が続きますが、様々な工夫によって人の心と心をつなぐ活動が継続されていくことを願います。今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。(文責：山中なつみ)